

# 同朋大学佛教文化研究所報

第 28 号

発行日 平成二十七年三月三十日  
編集・発行 同朋大学佛教文化研究所

代表者 小島 恵昭

〒四五三八五四〇

名古屋市中村区稲葉地町七の一

TEL (〇五二) 四二一―三三三

FAX (〇五二) 四二一―三六九

e-mail: bc-inst@doho.ac.jp

(題字は池田勇諦元学長)

本の縁ということについての体験を書いてみる。

京都の速水春曉(しんすい)画作の『絵本忠臣蔵』(半紙本、前後編各一〇冊、前編寛政十二年(一八〇〇)刊、後編文化五年(一八〇八)刊)という本の前編だけを、昭和五十七年四月に、今はなき伊藤白州堂から購入している。その後、昭和六十二年七月に、名古屋の藤園堂の店頭と同書前後編が出ていた。前編と後編を取り合わせた本であった(蔵書印が異なっていた)。ところがよくよく見てみると、白州堂から購入した前編に捺してある蔵書印と、藤園堂店頭の後編の蔵書印が同じものであった。もちろん嬉々としてこちらも購入し、重複した前編は、引き取ってもらった。その時のメモに、「蔵書印を見るに白州堂本と同じ 五年余を経て我手に揃う 一奇と言うべし」と記している。嬉しさの程が窺えよう。

元禄十五年(一七〇二)に起こった赤穂浪士一件は、長いこと上演、小説化することが禁じられてきた。ようやく浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』(竹田出雲(いずも)等作)が上演されたのが、四十六年後の寛延元年(一七四八)のこと。小説化されたのは、九十八年後のこの『絵本忠臣蔵』をもって嚆矢とする。それだけに、あちこち埋木(板木を彫って訂正すること)の跡が残っており、出版が難産であったことがわかる。詳しくは畏友山本卓氏(関西大学教授)の『舌耕・書本・出版と近世小説』(平成二十二年)を参照されたい。

次も端本が揃って完本となった話。

## 和本の縁

同朋大学文学部人文学科教授 服部 仁

先生の中公新書『江戸文化評判記』(一九九二年)の一八五―六頁に書いてある。「こちらの知人」というのが、すなわち小生である。

このほか『名古屋別院史』の仕事にかかっておられた蒲池勢至先生が、京都大学蔵の『三猿物語』(名古屋の貸本屋大野屋惣八旧蔵本)を閲覧しようと思ったら、既に服部仁が写真をとっていた(現在は別本を架蔵している)とか、閲蔵で別院展を催した際に、そのチラシの大幅の絵を見て、これは『遠山奇談』の挿絵を思わせると安藤弥先生にお知らせしたこととか、和本にまつわる話は尽きないが、紙幅が尽きた。

昭和六十三年六月に出た『藤園堂書目』に、『化生(けいせい)郡(ぐん)野(の)枕(まくら)』(東都言々斎作、半紙本、全四冊、天明三年(一七八三)刊)という上方版の初期読本(巻一―三の端本)が掲載されていた。端本とはいえ、『國書總目録』等未載の珍本ゆえ、少々値が張ったが思い切って買ってしまった。直後に、中野三敏大先生(九州大学名誉教授、文化功労者)から連絡があり「巻四を持っているのであげよう。ついては、巻一―三のコピーを下さい。」とのこと。もちろん当方に異存などあるはずもなく、ご意向どおりにさせていただいた。これまた、巻一―三の蔵書印と巻四の蔵書印は同一であったので、本来かくあるべき姿に戻ったことになる。これほどまでの幸運があったにもかかわらず、本書について論文を何も書いていないことは無念である。

## 「柳田賞を受賞して、二題」

蒲池 勢至

## 一 毛坊主と「まいりの仏」

## (一) 柳田國男の「毛坊主考」

昨年、はからずも第四十九回柳田賞を受賞した。まったく考えたこともなかったのに、知らせを聞いたときは驚いた。受賞対象は『真宗民俗史論』（法藏館、二〇一三年一〇月）である。柳田國男の命日である七月三十一日が発表と決められていたが、事前に受賞理由の報告があり、その中に次の一文があった。

著者が取り上げた問題は、柳田國男自身の問題でもあった。「毛坊主考」（一九一四年）、「俗聖沿革史」（一九二二年）、「豆手帖から」の「樺皮の由来」（一九二〇年）、「仮面に関する一二の初見」（一九二五年）の「肉付き面」などがある。また「惣仏」は岩井宏實が取り上げ、柳田國男も賛意を表した、現代のムラに中世の惣村制が生きている事例になる。著者の学問が、民俗学の本道を躍進させるものであることを喜びたい。

拙著『真宗民俗史論』は、「真宗と民俗」の関係と真宗門徒が伝承してきた「真宗民俗」について論じたもので、これまでの調査・論考をまとめたものであった。正直、こうした課題の研究テーマは、現在の民俗学のなかではマイナーである。研究者も少ない。私としては民俗学の片隅で、ほそぼそと在野の立場から研究を続けてきたつもりであった。だから審査報告の中に「著者が取り上げた問題は、柳田國男自身の問題でもあった」という記述をみたとき、畏れおおい過分な評価であると、これまたびっくりした。しかし、ふり返ってみれば民俗学と出会った学生時代に、柳田國男の「毛坊主考」「俗聖沿革史」を読み、この課題を展開させた堀一郎の『我が国民間信仰史の研究（一）宗教史編』（創元社、一九五三年）

や竹田聰洲先生の『民俗仏教と祖先信仰』（東京大学出版会、一九七一年）を必死に何度も読んでいた。二十代後半、真宗史や真宗学を再び学ぶ機会を得たが、「真宗の原初の姿」を求めたいという気持ちが強くなった。寺院が成立して宗派教団に属する僧が止住する以前、人々はどのように仏教と接触し、救済を願ったのか、生活していたのか。毛坊主の課題が底流していたのであろう。

「毛坊主考」の書き出しは、次の記述から始まっている。

飛驒の莊川の谷は、上流よりも下流の方が深い山家である。：（中略）：たしか国境に近い小白川という大字であったかと思う。路傍の小家の縁に腰掛けて雨に沾れて怪しい弁当を食べながら、ふと薄暗い座敷の中を覗くと、この家不相応に大きな仏壇がきらりと光っている。この辺は真宗の盛んな処だと聞いたがなるほどそうだと云うと、道連れの越中の人が、おまけにこの家は御寺です、上を御覧なさいという。今まで気が附かなかったが縁側の天井にはまさしく径七八尺の釣鐘が釣ってある。それから住職もそこに働いていた。万筋の単衣か何かで雨の中をどこへか厩肥を運んでいる。根っから愛相のない男だ。そして少しも坊主らしくない。頭には我々よりも長い毛が生えている。自分ははあこれが例の毛坊主だなど思った。

柳田の年譜をみると、明治四十二年（一九〇九）五月二十五日から七月八日まで木曾、飛驒、北陸路を視察旅行とあるので、このときの見聞によるものであろう。柳田は「毛坊主」について以前から関心をもっていった。『本朝俗諺志』巻四に、

飛驒の山中に毛坊主というあり。農業・山樵をなすこと常の百姓並なり。はるかの奥山にて出家などはなき処なり。人死したるときはこの毛坊主を頼みて弔うなり。代々譲りの袈裟を掛け鉦打ち鳴らし経念仏してとぶらうことなり

と指摘し、また『笈埃隨筆』卷二飛驒里の条として、

当国に毛坊主とて俗人でありながら村に死亡の者あれば導師となりて弔うなり。……寺号を呼ぶといえども、住持は皆俗人にして別名あり。初めの三人は寺号なければ何右衛門寺または何太夫寺と称し、同じく亡者の弔い祖先の斎・非時をつとむ

と引用している。文献史料では知っていたが、実際に毛坊主を見たのは初めてであった。このとき柳田が見た毛坊主と住居は、家道場とよばれるものである。真宗の道場には、形態や名称から惣道場・立合道場・毛坊道場・別当道場・辻本道場・下道場・内道場・家道場・講道場・自庵・看坊・法名元・本尊元がある。道場役・毛坊主・ボンサマ・オ坊サマなどと呼ばれた在俗の宗教者が主宰・管理してきた。家道場は、縁側の軒先に吊り下げられた喚鐘がなければ、そこが真宗門徒の道場であるとはわからない。こうした道場は、近世の元和（一六一五〜二四年）から寛文（一六六一〜七三年）までの時期に多くが寺院化したのが、明治期になって寺院化したものもある。それでも、いまなお中部や北陸の山間部、あるいは奈良県山間部などには多くの道場が残されている。

柳田の見た毛坊主と道場も、莊川谷筋の山間に点在する村々の一つであったが、留意すべきは、十五世紀後半以降の段階で既に教団組織に組み入れられた毛坊主と道場の形態であった、ということである。拙著では前半において、真宗教団の展開のなかでこうした道場が寺院化していくことの民俗的意味と変遷について阿弥陀如来の絵像本尊・オソウブツ・御文・葬送儀礼などから具体的に論じた。

「毛坊主考」は真宗の毛坊主や家道場の記述から始まり、さらに「毛坊主」が題目にもなっているが、柳田の「毛坊主」は必ずしも真宗だけの意味ではない。飛驒の毛坊主から全国各地おける毛坊主の存在について知見を述べ、さらに鉦打ち、塚、鉢叩き、茶筌及びササラ、夙の者、阿弥陀聖にまで及んでいる。つまり毛坊主の前身がヒジリであるとして、半僧

半俗の俗聖のことを意味している。遊行回国したりムラの中で生活したりしていた俗聖が、中世末期から近世にかけて成立した教団や寺院に取り込まれて止住するようになる前の姿、つまり寺僧以前の姿に関心があり俗聖としての宗教形態と信仰生活が「毛坊主」であった。

## （二）まいりの仏と太子寺

「毛坊主考」巻頭に見られる飛驒の毛坊主に対して、「樺皮の由来」は一段と古い俗聖の形態について捉えたものであった。

久慈から南、釜石から北、殊に閉伊二郡の村々に於ては、旧家と謂ふよりも名族と呼ぶよりも、カバカハの家と聞く方が解りが早い。……カバカハは白樺の樹皮を利用した一種の紙である。……更に必要だったのは阿弥陀様の御影、乃至は六字の御名号である。……野の末森の奥の人生は、結局は一卷の古い樺皮に依って、救済せられねばならぬ場合が多かったのである。地頭の富が一寺を建立し、一軀の本尊を安置するを得た以前、あの塚の松の木に名号の一軸を掛けて、村の者ばかりで死者を取置きしたさうだと云ふ話が、至る處に語り伝えられて居る。

カバカワについては、『先祖の話』の「色々のホトケ」でも「或いは詣りのホトケと同じものかも知れぬが、此方は寺の無い村々に於て、死者の取置きの日に掛けて拜ませたといふ話もよく聴いて居る」と触れている。これは岩手県を中心に「まいり（詣り）の仏」と称される民間信仰で、地元の司東真雄、門屋光昭等によって調査発見され論じられてきた。同族祭祀の形態で仏別当などよばれる総本家筋が祭祀権を持ち、旧暦十月を拜み日として現代にまで伝承されている信仰民俗である。信仰対象は多様で、木像では阿弥陀如来と孝養太子像。画像では阿弥陀、名号（六字・九字）、聖徳太子（孝養・黒駒・講讚・講讚黒駒・太子と連坐御影等）、善導大師・七高僧他三十三種という（門屋光昭「まいりの仏（十月仏）」

の祭祀 前編・後編」『岩手県立博物館報告』第三号・四号、一九八五・六年。  
 「まいりの仏」とは何であるのか、この点についてはっきり提示してくれたのが、藤田定興の「会津地方太子信仰の真宗的要素」(『高田学報』七四、一九八五年)であった。南会津の真宗高田派寺院は、承応四年(一六五五)に、(一六五五)にまとまって専修寺末になっているが、それ以前は「太子守卜称シテ無本寺ナリ」「古町東寺沢安照庵宥德太子守」(安照寺由来記)とあるように、無本寺にして妻帯する「太子守」であった。藤田は安照寺(福島県南会津郡南会津町宮床)蔵の方便法身尊像四幅太子と連坐の画像一幅、太子略絵伝一幅など、また室町期を降らない会津地方の中世太子木像を紹介された。そして、太子守の徒が十四世紀末から十五世紀初頭には存在していたことを明らかにされたのである。この論文に導かれて、同朋大学仏教文化研究所も一九九〇年九月に南泉寺(高田派・福島県南会津郡南会津町静川)・安照寺(高田派・先掲)・光照寺(大谷派・福島県河沼郡会津坂下町)などを調査した。残念ながら安照寺の法物は、一九八九年一月の火災によって焼失していたが、「太子守」の痕跡を確認している。

「まいりの仏」や「太子守」こそ、柳田の言う俗聖の姿であり真宗系の毛坊主であった。信仰対象は雑多にして近世のものが多く、地方作ということもあって年代確定が難しいが、その中において南北朝から室町期の画像類がある。花巻市東和町浮田・松崎阿弥陀堂の和朝高僧太子先徳連坐像と善導大師像、北上市の昆野薫氏所蔵・善導大師像などで、主要なものには『真宗重宝聚英』六・七・八巻に収録されているので参照された。「まいりの仏」は非常に重層的な民間信仰で、初期真宗や浄土系の念仏信仰、真言系の念仏信仰、太子信仰などが錯綜している。しかし、そのなかに初期真宗の影響がはっきりと認められ、とりわけ高僧連坐像や和朝太子先徳連坐像が注目される。関東における親鸞以後、北への親鸞門流の展開と定着という初期真宗の姿が彷彿とする。寺院化した真宗寺院に伝来したのも併せて、親鸞以後の先徳連坐像の札銘を挙げてみる。

①南泉寺(福島県南会津郡南会津町)・和朝先徳連坐像

「日本源空聖人」「釋親鸞聖人」「釋成然」「釋善然」「釋善明」「釋明法」  
 「釋唯信」

②安照寺(福島県南会津郡南会津町)・和朝太子先徳連坐像

「日本源空聖人」「親鸞上人」「釋性證」「釋佳教」「釋願誓」「釋報名」

③松崎阿弥陀堂(岩手県花巻市東和町)・和朝太子先徳連坐像

「愚禿親鸞位」「釋信海」「敬願」「釋信明」

④称念寺(仙台市新坂町)・和朝先徳連坐像

「釋親鸞」「釋无為子」「釋覚信」「釋智性」「釋淨教」「釋海法」

⑤康善寺(福島市五月町)・和朝太子先徳連坐像

「釋親鸞和尚」「釋明教」「釋本誓」「釋願智」「釋願力」

⑥米生寺(青森県西津軽郡鯉ヶ沢)・和朝先徳連坐像

「親鸞聖人」「釋是信」「釋淨信」「釋〇円」「比丘尼法明」「釋惠念」

「釋仏念」「比丘尼仏明」「釋道円」「比丘尼信性」

初期真宗史の研究では、こうした門弟を「親鸞門侶交名牒」と対照させて確定させるが、不明な門弟も多い。④仙台称念寺は、もともと会津に在って移動しているが、この和朝先徳連坐像などは南泉寺のものと札銘は異なるものの類似している。無為子の門流であろう。①から⑥までの門弟に「釋」が付せられていることも共通している。⑥米生寺の和朝先徳連坐像は、近在の村堂屋根裏から近世発見されたものというが、「釋是信」の名前がみえる。盛岡本誓寺は親鸞の弟子是信の開基であるが、その分派である秋田県仙北郡美郷町六郷の寺院を調査したとき、善證寺の記録に是信の開基伝承があった。長明寺には、痛みがひどく人物像などの描き方が稚拙であったが、図像的には古い「光明本」があった。上半分に放光六字名号と高僧像、下半分に和朝太子と眷属六人、下部に三菩薩の図像である。横手市の円浄寺・光徳寺には「まいりの仏」とみられる阿弥陀如来絵像や半金色善導大師の絵像もあった。岩手地方から奥羽山脈をこえて是信の門流は展開したのであろう。確定し得なくても、

こうした一群の初期真宗の流れを汲む人たちこそ、柳田の毛坊主であり俗聖であった。

先徳連坐像とともに「まいりの仏」を特徴付けるものが、画像の中に夫妻像や女性などを描くもののあることである。昆野薰氏(北上市口内町)蔵の善導大師絵像(応永二十三年・一四一六)には、下方に六人の僧俗姿が描かれている。菅原辰夫氏(江刺市増沢)蔵の和朝太子先徳連坐像には、「信空法師」「釈実念」「深海上人」「釈唯道」「曇鸞上人」とともに女性の「実明陀尼」が描かれ、千田孝男氏(北上市更木町)蔵の黒駒太子画像の下部には女性を含む三名が描かれている。平野昌氏蔵の善導大師像(于時応永元年七月十四日)銘)下部には、「釈明円禪尼」/相好弥陀八万四一/「光明十方不為/余縁光普照唯見念/仏西方極樂得往生/釈願性禪門」とあって、釈明円禪尼と釈願性禪門が夫妻で西方極樂往生を願ったことがわかる。永和三年(一二七七)成立の聖問『鹿嶋問答』に浄土の行人とはいいなながら十人のうち八・九人まで新堂を建立すると専ら太子を本尊として安置している、とある。「阿弥陀ヲサへ背クマテコソ無ケレトモ」ともあるので、太子を中心にして阿弥陀を祭祀するという形態で、親鸞の太子信仰とは別な浄土往生祈願と死者祭祀・追善供養的な一面をもつ雑修的な信仰であった。柳田は「毛坊主考」や「禪皮の由来」先祖の話」などで必ず「寺の無い村々に於て、死者の取置きの日に掛けて拜ませたといふ話もよく聴いて居る」と述べているが、「まいりの仏」が死者の葬送に使われていたのも、こうした信仰からであろう。

さらに「まいりの仏」や「太子守」について一言すれば、関東の喜八道場(茨城県小美玉市小川)と笠間光照寺(茨城県笠間市笠間)も関係させて考えるべきである。喜八道場には二十二光阿弥陀如来(室町初期)・善導大師像・聖徳太子勝鬘経講讃図が所蔵されており、正月と盆の時期(一月十六日と八月十六日)に開帳している。与沢には長葛姓の家が三五・六軒あるものの長葛喜八家は一軒の分家のみ輩出で、一族によるお参りなどはないという。しかし、所蔵の画像は「まいりの仏」につながる内容と仏堂による祭祀形態である。笠間光照寺にも室町中期頃の

十六歳勝鬘経講讃図があって、最下部に端座して合掌する僧尼四名の人物、「願宝房」「蓮善尼」「空願房」「空善尼」を描いている。信越国境・秋山郷の太子信仰まで含めると、「まいりの仏」の問題は広域に展開できる。

## 一 蓮如上人絵伝・勝楽寺本の絵と裏書

柳田賞の受賞対象となった拙著『真宗民俗史論』のなかで、一つ重要な訂正があるのでここで報告しておきたい。第五章では「蓮如伝承の生成と門徒の信仰」について、『蓮如上人絵伝』を民俗資料として分析する方法で追求した。このとき勝楽寺本(長野県須坂市)は重要な一本であった。というのは、顕如による天正九年(一五八一)の裏書が付されていたからである。

蓮如上人五百回忌を迎えるにあたって、全国の蓮如上人絵伝を本山調査班が確認作業をはじめたとき、すでに大阪市博物館図録『真宗文化』(一九七二年)と北西弘『一向一揆の研究』「史料編・裏書集」(春秋社・一九八一年)に天正九年として紹介されていたので、勝楽寺本の存在はわかっていた。そこで早速に見ると、他の蓮如上人絵伝とは明らかに異なるすぐれた絵伝であった。多くの蓮如上人絵伝は、末寺院や門徒が志願して町絵師などによって、蓮如上人三百回忌(寛政十年・一七九八)以降に製作されたものである。したがって本山下付の裏書もまずないものであった。これに対して、勝楽寺本には裏書があり、絹本で絵はしっかりと描かれていた。すやり霞も青色で天正頃のものと同定できた。裏書も一見して不自然なものではなかった。しかし、後に調査資料を整理して全国の蓮如上人絵伝を成立年次ごとに並べたとき、とびぬけて成立が早かったのである。そこからいくつかの疑問を呈した。まず①顕如による本山下付という正式な裏書があること、②絵相の内容を見ると上人三百回忌以降のものと同じものが多く描かれていること、③特定寺院の縁起絵伝という形ではなく、蓮如誕生から葬送まで一代を描い

ていること、④三百回忌以降の四幅本のものと同じ絵相の構図を持った同系のもがあること、などである。そうすると天正九年の裏書の真偽が問題になった。そこで、第一線で活躍している真宗史研究者に意見を求めると、花押の筆勢が弱かったり宛所がなかったりして疑問もあるが、かといって明らかに偽作とも断定できないという見解がほとんどであった。こうした理由から、調査報告書の段階では「仮に天正九年の裏書が疑わしいとしても、他のどの蓮如上人絵伝よりもすばらしいことは変わらない。そして、裏書がなくても近世初期頃の絵伝と判断できるのではないか」と結論付けた（『蓮如上人絵伝の研究』真宗大谷派出版部、一九九四年）。

ところが今回、蓮如に関する他の論考と併せて再構成し編集したとき、改めて勝楽寺本の成立年代を次に再考した。絵伝に描かれている蓮如伝説などの伝承は、近世初期頃には成立していた。裏書も三幅それぞれに添付されて一具のものであり、「蓮如上人縁起」という表現も「絵伝」ではなく「縁起」になっていて古体と感ぜられる。描き方の技法が他のものと比べたとき、やはり格段にすぐれている。こうしたことから「つまり、明らかに本山側でなんらかの理由で製作された、特別な三幅本の蓮如上人縁起であった、ということになる。嫁威し肉付き面や腹籠もりの聖教といった伝説が成立していたかどうか確定できないが、総合的に判断すると勝楽寺本の天正九年成立をみとめてもよいだろう」と結論したのであった。報告書のときよりも、成立年代を上げたのである。しかし、これは誤りであった。

拙著は大谷大学へ学位申請した論文であったが、口述試問のとき主査をしていただいた草野顕之先生より下坂守「図説『蓮如上人絵伝』—脇役たちの画像」（『蓮如—あなかしこの世界—』真宗大谷派岡崎教務所、一九九八年）の論考と結論が違っていると御指摘を受けた。下坂氏は勝楽寺本の第二幅に描かれた二人の女性画像に着目されている。一人目は吉崎御坊での仏法聴聞に訪れる女性で、「束ねた髪を頭上の後ろから輪

のように前向きへ曲げた鬘まげに、おおきく後ろに突き出た鬘たまの髪型をして描かれている。この鬘は遊女勝山に始まるといわれる「勝山鬘」で、他の絵画資料などからこの種の鬘が十七世紀半ば以降のものであることは間違いないという。鬘たばも、どんなに古くとも十七世紀の後半を遡ることとはないとのことである。二人目の女性は、「嫁威し肉付き面」の嫁であるお清の姿である。吉崎聴聞からの帰り道に鬼面に出会う場面で、「頭巾を被った小袖姿の彼女が着けている黒い帯はかなり太く、またその結び目は、結びあがり水平な「文庫結び」に近い形をとっている」。着目点はこの帯の太さである。寛永・慶安（一六二四〜五二）頃まで女性が太い帯をしめることはまずなく、事例としてあげられた「洛中洛外図」〔参詣曼荼羅〕（十六世紀から十七世紀初頭の製作）の女性は細い帯であった。つまりお清のような太い帯は元禄以後（一六八八〜一七〇三）のもので、いろいろな結び方が行われるようになるのは延宝期（一六六一〜八一）に「吉弥結び」と呼ばれるような結び目が出現して以降のことという。つまり二人の女性の画像から判断すると、描かれたのは「江戸時代の前半、世紀でいえば十七世紀後半以降に生きた女性」ということになる。ということは、勝楽寺本の絵の成立は十七世紀後半以降ということである。

下坂氏は裏書について何も述べていないが、絵の成立が十七世紀後半以降となると、裏書はまず「真ではない」ということになる。これまで研究所の調査で、ずいぶん多くの裏書を見てきたが、裏書の判定は難しい。裏書の存在は成立や下付年次の決定的史料となるので、どうしても影響を受けてしまう。各宗主の花押比較はあるものの、まだまだ裏書の判定基準が確立されていないということであろう。以前たしかに下坂氏が指摘した論考を一度見ていたことを思い出したが、時間的経過もあって拙著の編集段階では完全に失念してしまった。道遠くして学成らず、の思いである。今後とも、多くの方のご叱正とご教示をお願いするばかりである。

## 《特別活動報告》

## 播磨と本願寺―親鸞・蓮如と念仏の世界―

安藤 弥

二〇一四（平成二十六）年九月二十七日から十一月三十日にかけて、兵庫県立歴史博物館において、掲題の特別展が開催された。企画委員として本研究所より青木馨（客員所員）・岡村喜史（客員所員）・安藤弥（所員・幹事）が参加し、図録解説の執筆、シンポジウムへの出講など諸業務に携わった。

図録の章立ては以下の通りである。

特別展「播磨と本願寺」（小栗栖健治）

第一章 播磨の念仏

第二章 親鸞から西国の浄土真宗へ

第三章 本願寺蓮如と播磨

第四章 一向一揆と播磨

第五章 亀山・船場両本徳寺の成立

親鸞と初期真宗（岡村喜史）

播磨門徒の形成について（岩谷教授）

英賀坊本徳寺と三河土呂本宗寺（青木馨）

播磨本願寺教団の形成―戦国期から近世へ（安藤弥）

浄土真宗の木仏本尊の授与について（神戸佳文）

この展示は、真宗大谷派姫路船場別院本徳寺史料調査（二〇一〇・一年）、「特別企画展 船場御坊の四百年」（二〇一一年九月）、真宗大谷派山陽教区法宝物調査事業から発展した企画である。蓄積しつつある成果をふまえ、今後も継続的に研究に取り組み予定である。

## 《研究所新収史料紹介》

○六字名号 一幅 紙本墨書 縦九一・四cm×横二七・二cm  
本願寺証如の筆と推定される六字名号（南無阿弥陀仏）。



○方便法身尊像 一幅（表）絹本着色 縦四五・八cm×横二〇・〇cm

（裏書）紙本墨書 縦三四・七cm×横二二・二cm

本願寺顕如の裏書を持つ阿弥陀如来絵像。元龜三年（一五七二）八月二十八日付で下総国幸嶋郡三村妙安寺門徒の願主釈成信に下付した一幅。



本願寺釈教如（花押）  
元龜三年八月廿八日  
下総国幸嶋郡  
三村妙安寺門徒  
願主釈成信

## 仏教文化研究所デジタルアーカイブについて

藤井由紀子 工藤克洋

二〇一五年度より、研究所では新たな試みとして、「アーカイブス 閲蔵」の立ち上げを計画している。閲蔵の名は、名古屋東御坊に開設され、同朋大学の前身となった「閲蔵長屋」に由来しており、このデジタルアーカイブによって研究所内に蓄積された調査資料データを整理し、かつ、研究所の活動を学内外に発信することを、立ち上げの目的としている。

アーカイブの構成は、二つに大別される。一つは、史料データを中心とする部分で、①当学・当研究所が所蔵する史料データの公開、②過去の調査資料の体系化、などを目指して、現在、作業を進めている。もう

一つは、①各研究会の活動、②所員の共同研究、などを紹介する部分で、研究所を母胎にした研究活動を支援し、広く紹介する場を提供することを目指している。

特徴としては、調査データと画像を同時に見られるようにした点にある。過去の調査資料を体系化するにあたって、別々に管理されてきた画像データと文字データを、一括資料として研究の材とすることは、当研究所における喫緊の課題であり、そのための工夫として画像一体型の画面づくりを試みている。また、年二回のギャラリー展示の内容など、調査研究成果とリンクさせている点も、本アーカイブの特徴である。

今後の展望としては、他分野、他機関との横断的な連携も可能だと考えている。たとえば、裏書の地名情報は、真宗史だけでなく、地域史の基礎資料になりうる。そのような形で他分野との横断を可能にするシステムとすることも、将来的には視野に入れている。

トップ画面イメージ



史料データページイメージ





## 《研究会活動報告》

## アジア仏教研究会 活動報告

武田 龍

実施日 5/21、7/23、10/6、12/19、2/19

参加者 玉井威、武田龍、宮崎保光、藤井由紀子、中川剛マックス

『法華経』（羅什訳、岩波文庫）を「葉草喻品」第五の途中まで読み進んだ。法華経は三乘方便、一乘真実の教えを明かす。

釈尊が舍利弗に対して授記をした譬喻品第三を承けて、信解品第四では、声聞でも成仏でき無上正等覚を得られることを知り衝撃をうけた大弟子たちが阿羅漢の境地に安住していた自身の間違いに気づき、須菩提・摩訶迦旃延・摩訶迦葉・摩訶目犍連の四人が「長者窮子の喩え」をもって如来説法の功德を讃嘆した。

葉草喻品は彼らの讃嘆を釈尊が「説くとも尽くすこと能わざらん」と軽くないところから始まり、「葉草の喩え」（「二草二木の喩え」とも）をもって如来の衆生教化の特質を示す。雨は一樣に草木・林・葉草を潤すが、名色各々異なるため、種性に称<sup>な</sup>いて生長し華果を得る。如来の説法を聞いても衆生がその機根に応じて理解するために、如来の説法を能く信じ能く受けることは甚だ希有なことになる。だが如来は衆生のありさまをよく知っているから深遠な法を拙速に説かない、とする。仏伝の有名な正覚後の「世間觀察譚」を下敷きにしたような展開で、經典の編集の仕方がわかる構成である。大乘經典といえども、素材は教団内に浮遊し伝承されていた原始仏教時代のエピソードを用いている。本章の長行と偈文は重頌の関係にある。

## 真宗史研究会活動報告

安藤 弥

二〇一四年度は次の通り、二回の研究会を実施した。

第一回目（通算第三〇回）

【日時】十一月二十七日（木）一六時半～一八時

【講題】『教如と東西本願寺』を読む

【講師】工藤克洋氏（研究所所員）

第二回目（通算第三一回）

【日時】二〇一五年二月二十三日（月）一四時～一六時

【講題】本願寺蓮如の譲状について

【報告者】早島有毅氏（元藤女子大学教授）

【コメント】吉田一彦氏（名古屋市立大学教授 本研究所客員所員）

本年度の第一回目は、真宗史研究会の通算三〇回目をととして、昨年度本研究所編で刊行した『教如と東西本願寺』の書評会を行った。評者は本年十一月一日付で所員に着任した工藤氏にお願ひし、論集所収の全論考にわたって内容整理と課題提起がなされた。

第二回目は「日本仏教の成立と展開」研究会との共催で行った。早島氏から、本研究所編『蓮如方便法身尊像の研究』の吉田一彦論文を中心に展開した蓮如による二通の譲状に関する史料学的な議論に対する学術的な批判がなされ、吉田氏のコメントの後、活発な研究討議があった。ここでは、単に譲状の真偽という問題ではなく、応仁二年（一四六八）・延徳二年（一四九〇）という段階における蓮如と本願寺教団の歴史的状况について、理解を深めていく議論がなされた。

次年度も引き続き二回程度の研究会活動を予定している。

「真宗列祖」研究会 活動報告

黒田 浩明

二〇一四年度は次の通り、研究会を実施した。

4 / 15、5 / 20、6 / 10、6 / 24、7 / 15、7 / 29、  
9 / 30、10 / 14、11 / 11、12 / 9、1 / 13

また、「真宗列祖」研究会の第四回となる発表会を、D o プラザ閣蔵  
2階・多目的会議室において実施した。

日時 一月二十七日(火) 午後三時から四時

講 題 真宗と女人往生の問題 ― 『女人往生聞書』の研究―

発表者 小島恵昭(仏教文化研究所所長) 川村伸寛(客員研究員)

黒田浩明(客員所員) 村上亘(同朋大学大学院O B)

この発表会は、大谷派の真宗学者においては比較的採り上げられること  
の少ない列祖の教学および思想に焦点を当て、その時代教学性を探求  
し、翻って現代の真宗人としてのあり方について考えることを目的とす  
る。そのために、当研究会が通年で研究してきた内容である、存覚上人  
の著書『女人往生聞書』について、各人のテーマにしたがって発表した  
ものである。主に本書の概略のほか女人往生思想や、それに対する差別  
問題を取り巻く諸課題について研究発表を行った。

発表の内容は、①『女人往生聞書』成立とその伝承、②『女人往生聞  
書』の概要、および「女人往生」の願文の考察、③存覚の女人往生理解、  
④浄土教に見られる性差別表現についての一考察であった。各発表後、  
簡単なまとめと質疑応答を行い、内容を深めた。

次年度も、存覚上人の著作を採り上げて研究会活動を行う予定であ  
る。

中国日本仏教思想史研究会 活動報告

藤村 潔

日程 5 / 28、6 / 18、7 / 23、9 / 11

本研究会では、大正大藏経にある『大乘起信論』(以下『起信論』・真  
諦三藏訳)を定本とし、漢文資料と岩波文庫本を輪読した。二〇一四年  
度は『起信論』を第四修行信心分と第五勸修利益分を精読し、本文すべ  
てを読了した。

修行信心分は、親鸞が『教行信証』「化身土巻」に引用している。「化  
身土巻」では、主に「外道三昧」について引用する。外道三昧とは、誤っ  
た見解、自我意識のとりわれ、世間的の名利に執着することを徹見する  
三昧行である。『起信論』では、その後、「真如三昧」が広説されるが、「化  
身土巻」では引用されない。この点、親鸞が何故「外道三昧」の概念に  
注目したのか議論となった。

また、修行信心分では「専意念仏」と称し、西方極楽世界の阿弥陀仏  
を説いている。岩波の翻訳では、「専意」を「専修」と訳しているが、『起  
信論』の文脈では、観想念仏と捉えるべきであろう。もし「専意念仏」  
と規定した場合、称名念仏を想起してしまうからである。よって、岩波  
本の「専修念仏」という訳は適切ではないと判明した。

以上、三年かけて『起信論』の原典解明を終えた。難解ではあったが、  
極めて有意義な学びであったと言える。

## 「日本仏教の成立と展開」研究会 活動報告

脊古 真哉

「日本仏教の成立と展開」研究会（小島恵昭・大山誠一・黒田龍二・脊古真哉・吉田一彦）では、各研究参加者の研究領域・関心を基礎に、幅広く日本仏教・日本宗教に関わる問題を取り上げてきている。二〇一四年度には、二〇一五年二月二日・二二日に現地踏査を、二〇一五年二月二三日に研究会を実施した。

現地踏査は、二月二日には、和歌山県の高野山麓の寺社である丹生都比売神社（かつらぎ町）、鞆淵八幡神社・大日堂（紀の川市）、慈尊院・丹生官省符神社などを訪ねた。二二日には、二〇一二年度の兵庫県の鶴林寺・東光寺の修正会、二〇一三年の奈良県桜井市の大神神社の御田祭、二〇一四年の東大寺の修二会に続いて、新春行事の調査として、旧花園村梁瀬の遍照寺・大日堂の修正会および付随する御田舞を見学した。

研究会は、真宗史研究会との共催で実施した。早島有毅氏（元藤女子大学）の「本願寺連如の譲状について」の報告が行なわれた。早島氏の報告は、小島恵昭所長、吉田一彦客員所員および脊古が明らかにしてきた連如の長男順如の位置づけをめぐる戦国期の本願寺教団のあり方についてのはじめの学問的な批判・反論であり、報告に対して吉田客員所員のコメントがあった。研究会のメンバー以外にも多くの参加者があり、戦国期の本願寺教団についての活発な議論を展開することができた。

このほかに、二〇一四年九月三日には、脊古と吉田客員所員が中心となり、初期の神仏習合の史料として知られている三重県伊賀市常楽寺の重要文化財に指定されている大般若経の調査を実施した。この調査には、藤井由紀子所員、松金直美所員（当時）が参加し、外部からも、曾根正人（就実大学）、上島享（京都大学）、関山麻衣子（加西市教育委員会）の諸氏の参加があり、この史料についての貴重な知見を得ることができた。

## 「教行信証」学習会 活動報告

吉田 曉正

講師 張 偉 先生

趣 旨 漢文として『教行信証』を読む

会 場 同朋学園Dオプラザ閣蔵2F 多目的会議室

テキスト 東本願寺刊『真宗聖典』（必要に応じて資料配付有）

開催日 5/22、6/26、7/24、9/25、10/23、11/27、

1/29、3/26

今年度も、『教行信証』『化身土巻』における善導の『観経疏』の引文を読み解きつつ、学習を進めている。（『真宗聖典』333頁）

「玄義分」において、「今この『観経』は、菩薩蔵に収む、頓教の撰なり」と確かめられているが、善導は、そこに二つの意味を見出した。一つは、従来の浄土教における解釈、「観経は、菩薩蔵に収められる」という人間主体の読み方であり、もう一つは、経典主体の読み、つまり、「観経は、菩薩蔵に「人を」収める」という解釈である。「法の音は心に灌ぎ、毛穴から入る」という善導の言葉がある。経典はただの書物ではなく、大乘へと導くはたらきであり、私にはたらいってくる経典という、善導の経典に対する感覚から見出されてきた受け止めである。この経典主体という善導の感覚を、親鸞は大事にしていることを踏まえ、読み進めている。続いて、「序分義」における、「如是」についての解釈を学習している。善導の了解と感覚を通して、親鸞の受け止めた法を尋ねたい。

二〇一四年度彙報

《研究所構成メンバー》

所長 小島 恵昭

所員 服部仁(人文学科) 木野美恵子(社会福祉学科)

平野仁美(社会福祉学科)

所員・幹事 安藤弥(仏教学科)

研究顧問 小山正文

所員(非常勤) 工藤克洋(十一月) 藤井由紀子 松金直美(十月)

客員所員

青木馨 岩瀬真寿美 大山誠一 岡村喜史

蒲池勢至 北畠知量 ギャラ・ラタナ・テラ

黒田浩明 黒田龍二 嘉木揚凱朝 脊古真哉

武田龍 玉井威 藤村潔 松金直美(十一月)

客員研究員

飯田真宏 市野智行 川村伸寛 棚橋めぐみ

特別研究員

中川剛 新野和暢 松山大  
花栄 高木祐紀

《所員会議》

4 / 15 5 / 13 6 / 10 7 / 15 9 / 17  
10 / 28 11 / 11 12 / 2 1 / 13 2 / 4

《公開講座等》

・「教行信証」学習会

∴開催日程は前掲活動報告のとおり。

・現地で学ぶセミナー

第1回 7 / 12

越前の宗教風土―超勝寺・誠照寺・織田文化歴史館・剣神社―  
講師 脊古真哉

第2回 11 / 28

近江最奥のかくれ里と奥永源寺の紅葉を訪ねる

―蛭谷(筒井神社・木地師資料館) 君ヶ畑(大皇器地祖神社・

高松御所金竜寺)―

講師 藤井由紀子

《ギャラリー展示》

・前期 「江戸期宗学から尾張教学へ―真宗僧侶の学問世界―」

(7 / 10 ∼ 7 / 22)

・後期 「続・本願寺教如と三河・尾張・美濃」

(11 / 7 ∼ 11 / 27)

《研究・調査活動》

・真宗寺院史料調査

4 / 2 成信坊(真宗大谷派・愛知県津島市)

8 / 18 願照寺(浄土真宗本願寺派・愛知県岡崎市)

9 / 10 ∼ 11 真宗寺(真宗大谷派・岐阜県海津市)・

應聲寺(真宗大谷派・岐阜県海津市)

9 / 18 ∼ 19 善重寺(真宗大谷派・茨城県水戸市)

10 / 2 西蓮寺(真宗大谷派・岐阜県揖斐川町)

2 / 24 岡崎市美術博物館(願照寺寄託史料など)

3 / 6 善重寺(真宗大谷派・茨城県水戸市)

・その他(随時、持ち込み、問い合わせのある史料の基礎検討など)